

雑兵物語

令和の時代に残したい本



令和の時代に残したい本

雑 兵 物 語

ぞう

ひよう

もの

がたり

乾（上巻）

けん

『雑兵物語』の時代背景

『雑兵物語』は、概ね江戸時代初期に誕生した兵法と軍学の書と見られている。当時は、日本の軍学史上最も注目すべき時代といわれ、戦国時代の実戦の経験から軍学が生じ、盛んに兵法や軍法書が発行されていた。また、国の中心が江戸に移り、「奴言葉」や「六方言葉」が用いられた文学も流行って盛んに刊行されていた。こうした機運の中で『雑兵物語』も生まれたと見られている。武士に珍重され、写本を重ねた結果、挿絵も付けられて、多くの『雑兵物語』が存在するようになった。(特に三十一の「又(馬取)」孫八の話は、後年に付け加えられたと見られている)

ところが、弘化三年(一八四六)刊行の木版の『雑兵物語』の目的は、それまでとは異なっていた。日本の近海にたびたび外国船が現れるようになり、危機感をもった諸藩が急に歩兵を増員する必要性からこの本を量産したのである。これは、しばらく平和な世の中が続く戦を経験したことのない者が増えたために、分かりやすい言葉で書かれた『雑兵物語』が実用書として注目され、外国との戦に備えたからである。嘉永六年(一八五三)六月、浦賀に黒船が来航すると国内が混乱し、『雑兵物語』は刊本の他に再び転写もされて、さらに多くの『雑兵物語』が存在するようになった。そのため、『雑兵物語』を集めてみると本によって内容に多少の違いがあり、本書も藤原春日行則のごとく、照合しながらまとめることになったのである。

『雑兵物語』には、明暦三年（一六五七）の江戸の大火と呼ばれる
「振袖火事」や、「関ヶ原（二六〇〇）・大坂陣（二六一四・一六一五）に
出陣した者が死滅し、島原の乱（一六三七）の経験者も腰がまがり、ろ
くに話もできなくなった」という記述があることから、成立年代のヒ
ントとされている。編者については諸説あるものの、高崎藩主松平
家との関りは深く、一般的には高崎藩主の祖松平信興（一六三〇—一六
九二）の作あるいは撰（編集）といわれ、享保十四年（一七三〇）に
は、第十代高崎藩主松平輝貞（一六六五—一七四七）が幕府に『雑兵物
語』を献じている。

「雑兵」とは、身分が低い兵士のことといわれるが、足軽や若党
など、武士に仕えて主人とともに戦う下級武士と、戦場で主人を助け
て馬を引き、槍を持つ中間・小者などのほか、夫丸などの村々から
駆り出されて物を運ぶだけの農民たちも多かった。『雑兵物語』は、
雑兵たちがその役割ごとに戦の体験を語るという形で綴られている
が、東国の方言などが用いられており、読み物としての面白さもそ
の魅力の一つといえる。

私たちが『雑兵物語』に触れる時、文字の使い方が現代より自由
で、所謂「当て字」が多いこと、そして言葉の豊かさに驚かされるの
である。今後は、こうしたものが失われてしまうのではないかという
危機感と、未来の人々への橋渡しとして「令和の時代に残したい本」
の一つである『雑兵物語』を今ここに記録する。

大工原

もくじ

上巻

一	鉄炮足輕小頭	てっぽうあしがるこがしら	9
二	鉄炮足輕	てっぽうあしがる	14
三	弓足輕小頭	ゆみあしがるこがしら	16
四	弓足輕	ゆみあしがる	19
五	鎗擔小頭	やりかつぎこがしら	21
六	持鎗擔	もちやりかつぎ	25
七	数鎗擔	かずやりかつぎ	29
八	旗差馬印持	はたさしうまじるしもち	32
九	馬印持旗差	うまじるしちはたさし	34
十	持筒	もちつつ	36
十一	持筒	もちつつ	37
十二	持弓	もちゆみ	38
十三	持弓	もちゆみ	39
十四	草履取	はさみばこもち	40
十五	挟箱持	はさみばこもち	45
十六	馬取	うまとり	49
十七	馬取	うまとり	52
十八	沓持	くつもち	56
	朝日出右衛門	あさひいでえもん	
	夕日入右衛門	ゆうひいりえもん	
	大川深右衛門	おおかわふかえもん	
	小川浅右衛門	おがわあさえもん	
	長柄源内左衛門	ながえげんないざえもん	
	吉内左衛門	きちないざえもん	
	助内左衛門	すけないざえもん	
	孫藏	まごぞう	
	彦藏	ひこぞう	
	筒平	つつへい	
	鉄平	てつぺい	
	矢左衛門	やざえもん	
	矢右衛門	やえもん	
	喜六兵衛	きろくべえ	
	弥六兵衛	やろくべえ	
	金六	きんろく	
	藤六	とうろく	
	吉六	きちろく	
頁	ページ		

下 卷		頁
十九	矢筥持 やばこもち	60
二十	玉箱持 たまばこもち	66
二十一	荷宰料 にぎいりよう	72
二十二	夫丸 ぶまる	76
二十三	又若黨 またわかとう	82
二十四	又草履取 またぞうりとり	85
二十五	夫丸 ぶまる	93
二十六	夫丸 またやりつとめ	97
二十七	又鍵掌 なみちゆうげん	101
二十八	並中間 またうまとり	109
二十九	又馬取 またうまとり	114
三十	又馬取 またうまとり	115
三十一	又(馬取) また うまとり	120
	矢蔵 やぞう	
	寸頓 すんどん	
	八木五蔵 やぎごぞう	
	馬蔵 ばぞう	
	左助 さすけ	
	嘉助 かすけ	
	弥助 やすけ	
	茂助 もすけ	
	古六(小六) ころく	
	新六 しんろく	
	孫八 まごはち	
	彦八 ひこはち	
	(孫八) まごはち	

*文中の太字は上州弁と思われる部分

凡 例

本書は初め、活字本として出版された『高崎市史』第三卷(高崎市が昭和四十三年三月に資料篇として発行)収録の「雑兵物語」を基にしたが、後に写本「雑兵物語」二卷一冊国立公文書館内閣文庫所蔵(浅草文庫旧蔵)の印影(『雑兵物語』(株)勉誠社 昭和五十二年発行)も参考にした。

著者の序文
ちよしゃ じよぶん

自序 じじよ

弓術・馬術・槍術・劍術の武芸は言うまでもないが、その他さまざまな技芸におい
きゆう ば そうけん

弓馬槍劍のわざはさらなり、その外くさぐさの業なにくれと、も
ほか じゆう

ても、武士の家に生れた人なら、誰もがこの書物で学ぶことが多いに違いない。しかし
うま これ まな
のゝふの家に生るゝ人、たれかは是を學ばさるべき。しかはあれども、

ながら、今は昔とはずいぶん変わつてしまい、もっぱら外見と好みに傾いて、

今はいにしへとやうかはり、ひたすら形容と風流とになりゆきて、お
え よ わ

自然と本物は少なくなり、内容の深さを伝えているといわれるものでも、同様に

のづからはまことすくなく、奥旨玄妙の傳へなど云も、その倚て興
ず おうしげんみよう つたえ いちう よつ おこ

最初の基本を忘れて本筋から離れたことを取り上げ、極めて表面的になつて

れるもとをすてゝすゑをとれるより、いともく輕々敷なりぬるは、
え かるがるしく

しまつたのは、非常に嘆かわしいことではないか。そこで我が家には古くから
なげ わがや

なげきてもなげかわしきわざならずや。こゝに我家にふるくより雜
ぞう

『雜兵物語』という二巻の書物が伝わっている。これは伊勢貞丈の翁が
ぞうひよう いせきたけ おきな

兵物語といふ貳まきのふみを傳へたり。こは伊勢貞丈翁も新井白
ひよう うふた つたえ いせきたけおきな あらいはく

新井白石の翁の家に所蔵していたのを写し取つて、その奥書に何某の作であるとは
あらいはくせき おきな
せきおきな
あり うつ え
たればと

石翁の家に在しを寫し得て、そのおくに誰人の作なることをしるよ

書いていないものの、野蠻な言葉やばんを借りて、よくその実情を明確に

しなければ、いやしき云の葉いをかり用もちひて、よくその情實じようじつを畫かくせ

書き付けていた。ある時、私は仲間と寄り集まって兵書を読みあつた。

るよし、しるしたりき。或日あるひ、我友わがどちよりつどひて兵書を講ず。か

その中に、この書があるのを発見して、それぞれに論じて口々に、ああ

たはらに、此書このしょあるをみて、おのくさたむしていへらく、あゝいに

昔の人の生き方はこうだったんだと。今の世の人は戦に直面して攻撃と守備、

しへ人の道に切なる事かくのごとし。今の世人は攻守戦對行闔規矩

規則と手本についても意見は主張するが、その根拠まで教え導いたというのは

準繩じゆんじようの説を唱ふといへども、かゝるふしまで教えみちびける事を

聞いたことがない。軍を率いる者でまれに一人くらい知り得ていても、少しも人に教えられ

きかず。将まれにひとりしり得づとも、豈衆えにさとさむにいたらん。

ない。それゆえ、この二巻の書物を桜の版木はんぎに載せて出版するよう、共感する仲間にしきり

されば、この貳ふたまきを櫻木さくらぎにのせて、わが同好のともがらにしめさ

に読み下して欲しいと強く勧められるので、読むのも並大抵ではなくて難しいが、この度は

まほしと、せちにそゝのかされて、えいなみがたさに、こたび貞丈翁ただたけおきな

貞丈の翁の所蔵本、他の家の蔵書までもあちこちから集めて修正し、將軍の御許しを

の本、はたことまきをも取集て校合し、公のみゆるしを蒙て、あ

いただいて、古いにしえの言葉と照らし合わせるようになった。こんなにも豊かな時代うまに生れて、
づさにゑてらすることゝはなりぬ。かくゆたかなる御代みよに生れいでゝ、
尽きぬほどのご恩おんとお恵めぐみをたくさんの人とともに、感謝めぐ申し上げることは、非常に
つきせぬおほむめぐみを諸人もろびととともに、あふぎ奉うれるは、いとも

恐れ多いが、是非ぜひとも昔がどうであつたかを、ずっと忘れることの

くかしこければ、いかでいにしへの御いさほしを、しばしも忘るゝ

ないようにと願ねがひ、こうして書き記しておこう。

事ことなからしめむと、かくはかきしるしつるになむん。

弘化三年こうか（一八四六）の一月の

こうか

弘化三とせといふとしのむ月の

はじめ

はじめ

ふじわらのかすがゆきのり
藤原春日行則

雑兵 武將は常に多くの兵士を召し抱えていたわけではなく、戦の時だけ領地の農民を招集することが多かった。二十人くらいが一組になって、役目ごとに組の小頭に管理監督されていた。その中でも、射撃の特技を持った者は戦の第一線をつとめていた。

食糧 食糧は三日分を持たされる。肩襷や両襷にした九つの数珠玉の中には、一食ずつに分けられた糰（干飯）が入っていた。糰は飯を乾燥させたもので、そのまま食べたり、湯でもどしたりして食べた。

数珠玉にした食糧

火縄を腕に巻き付けている



鉄砲の足輕隊組頭

てつぽうあしがるこがしら

一 鉄砲足輕小頭

あさひいでえもん
朝日出右衛門

杖を突いて指図する役目だから、嫌われても仕方ないが、言うことを聞かれよ。
杖をつっぱる役だから、推量をもかへり見ず申事を聞めされよ。

言うまでもないが、首に引つかけた数珠玉のような兵糧の結び目を、襟の
いふまでは御座ないが、首に引懸た数珠玉の結目を、ゑりの真中

真ん中にくるようにずらされよ。胸の上に兵糧の玉があれば鉄砲のねらいがつけられない
へ当る様にくりこしめされい。胸の通りに玉があれば鉄砲がためら

角(角射ちの
的) 十五間
(二十七・三
寸)の距離か
ら射つ。八寸
(二十四寸)
四方の板に
二寸(六寸)
の星丸。

十分に気持ちを引き締めて、無駄な玉を射ち捨ないように射ちなされよ。

とつくとたましいをひっちめて、あだ玉をはじき捨ない様にはなしめ

決められた通りに鉄砲を射つ時でも、鉄砲を入れる革袋は捨てなざるな。

されう。御定のごとく、鉄砲はじく時でも、なめし袋は捨なざるな。

杖 先込
めの鉄砲の
銃身に弾丸
を込めた
り、銃身を
掃除したり
するための
細長い棒。

革袋を二つに折って、替えの弾込め棒を二本でも三本でも、革袋の口から突っ込んで、
二つに折て替杖を二本でも三本でも、なめし袋の口からつつばめ

右の脇から後ろの胴の隙間へ突っ込んでおかれよ。

て、右の脇に後の胴のすいた所へつつこんでおきなされよ。横にさ

横に差したら、味方の人の目が危ないから、よい頃合に差しなされ。

したらば、味方の人の目があぶない程に、よひころにさしなされい。

縦に差したら、笠に触って具合が悪いだろう。

竪にさしたらば、笠にさわってわるかんべい。